



魔女の弟子と領主様

「エリスちゃん、最近元気かな」

「はいっ、元気です！ エリスは元気です！」

今日はししよと一緒に領主様のお館に來ています。いつものようにポーシオンを売って、お金と色々な物をいただく。エリスとししよの日課です。

でも今日はいつもと違う。館の屋根が壊れたと言う話を聞いたししよが『いつもの札だ、それくらい直してやる』と屋根の修理を申し出たのです。だからエリスは今、応接間でエドヴィン様と二人きりなのです。

著 徒然ナルモ
画 霧月

A Solitary Witch
and a Lonely Girl

CC-NCVHS

「えっと、その。そろそろ秋だね、寒くないかい」

「寒くないです！ エリスへっちゃらです！」

ただ、二人きりになると途端にエドヴィン様がやりづらそうな顔をしているのが気になります。エリスと話すの嫌なのでしょうか。

「はあ、子供と話す機会なんて滅多にないから……話題が分からないな」

「どうしました？」

「あ、いや。そうだ……最近皇都から取り

寄せたお菓子があるんだけど、食べるかい？」

お菓子、エリスはあんまりお菓子は食べません。そもそも食べる機会が今までなかったのと、エリスはししよの料理が好きなのでお菓子でお腹を膨らませたくないから、というのがあります。

けどエドヴィン様はエリスに気を遣って戸棚から缶に入ったクッキーを差し出してくれます。

「どうぞ、あんまりいいやつじゃないかもしれないけど」

そう言って目の前に出されたのはこんがり焼かれたクッキーだ。本とか読んで知ってはいるけど実物を見るのは初めてかもしれない。

興味があつた、甘いお菓子とはどう言う物なのか。それに折角お出ししてくれた物を食べないと言うのもアレだし。よし……と覚悟を決めてエリスは一枚のクッキーを摘んで口に運び……。

「ッ……!?」

お、おいしい！ 甘い！ サクサクッ！ プルプル身が震えるくらい甘い。お菓子ってこんなに素敵な味がするんだあ。柔らかくて、甘くて、優しい味。

（う……もう一枚食べたい、けど……あんまり食べるとししよの料理が）

クッキーはあつという間に口の中で溶けて消えてしまう。けど目の前にはまだクッキーがある。それを確認するなりエリスの手は勝手にクッキーに伸びてしまう。ダメだ、これ以上食べるとお夕飯が食べられなくなる。でもクッキー食べたい！

「む、むおとおお……」

「ど、どう言う感情？ 美味しいの？ まずいの？」

ダメだー！ 勝手に指がクッキーを捕まえるー！ 口が開くー！ おいひいよー！

「ムシヤムシヤ、美味しいですッ！」

「それはよかった、この歳になるとお菓子もどうにも喉を通らなくてね。よければ全部食べて欲しいんだ」

「全部!?」

ジロリと缶の中を見る、クッキーはまだまだある。う……これ、全部食べていいのか。そんなの、そんなの断るのも申し訳ないしなあ！

「それじゃあ遠慮なく——」

「終わったぞ、エドヴィン……ん？ どうした？ エリス」

「むひゃっ!? ししよ!?」

ふと、背後から声がしてエリスは咄嗟にクッキーを遠ざける。なんでか分からないけどししよにクッキー食べてるところを見られたくないから。

「ありがとうございます賢人様。実は今エリスちゃんにクッキーを……」

「た、食べてません！ 食べてないですー！」

そのままエリスは椅子から飛び跳ねししよに抱きつき誤魔化す。魔女の弟子たるものこんな甘味に負けてしまったなんて事あっていいはずがない。だから誤魔化す、恥ずかしいから。

「ししよー！ エリスはクッキーなんて食べてません！」

「そ、そうか」

けど、内心では思う……クッキー、もうちょっと食べたかったなあ。